

## 5. 地形調査報告

### (1) 調査の概要

今回の調査地域は、北は兜沼周辺から南は天塩川付近までの地域で、中心部に日本有数の湿原であるサロベツ原野があり、その西側、日本海に面する地域は、海岸沿いに砂州・砂丘が南北に伸びています。湿原の北西部や東部には丘陵が続き、湿原の西部には豊徳台地、湿原の中心部には円山台地（まるやまだいち）が存在しています。

サロベツ地区の地形調査は、以下の内容により 2006(平成 18)年度に実施しました(写真 - 16)。

- 1)資料収集：調査地域の概況、地形・地質・地盤などに関する文献等の資料を収集。
- 2)空中写真の判読：撮影時期が最も古い写真と、最新の写真を使用して地形分類を行った。
- 3)現地調査（8～9月にかけて8日間及び10月に5日間実施）：調査地域において、地形調査、露頭調査、簡易ボーリング等、地形分類図を作成するために必要な調査を行った。
- 4)地形分類図の作成：空中写真の判読と現地調査の結果を照合しながら、地形分類図を編集・作成した。

次ページの表 - 7 にこの調査における地形分類の区分項目を示します。

地形調査の結果は、この調査報告書に添付する付図3「湖沼湿原調査地形分類図 サロベツ原野」(1:30,000)にまとめています。



写真 - 16 サロベツ原野の写真

### (2) 調査の結果

#### 1)地質の概要

サロベツ地区の基盤を構成する地質は新第三紀の地層で、下部より声問（こえとい）層、勇知（ゆうち）層、更別（さらべつ）層からなり、その上位に、第四紀更新世の兜沼層、段丘堆積物が続き、さらに上位には、完新世の沖積層が見られます（表 - 8）。

これらの地層の分布状態を概観すると、新第三紀の更別層は、上サロベツ原野西部の豊徳台地の北縁部及び北部の阿沙流（あचार）丘陵の西縁部の台地崖にわずかに分布するほか、サロベツ原野の下層の第四紀層の下位に伏在分布しています。

表 - 7 地形の分類

	区分		定義
	大区分	小区分	
自然地形	山地	山地・斜面	山地・丘陵地のいわゆる斜面の部分。段丘崖にも適用。
		主要分水界	山地・丘陵地（主として斜面で表現される地域）における主要な稜線で河川の流域界をなすもの。
	台地・段丘	完新世段丘面	約1万年以降に形成された段丘面。
		更新世段丘面	約1万年以前に形成された段丘面。
		火砕流台地	火砕流が堆積して生じた平滑で広大な台地。
	低地の一般面	扇状地	河川が山地から出た個所に河川が運び出す土砂が堆積して形成された扇形の地形。
		緩扇状地	上記扇状地に比べて傾斜が緩いもの。
		氾濫平野・谷底平野	河川の堆積作用により形成された低平な土地。
		三角州	河口における河川の堆積作用によって形成された平坦地。
		海岸平野	相対的に海（湖）面の低下によって陸地となった平坦地。
	凹地・浅い谷	凹地・浅い谷	台地・段丘や扇状地などの表面に形成された凹地や浅い流路跡、または、隣合う扇状地の境界付近の相対的に低い部分。
	低地の微地形	自然堤防	洪水時に運ばれた砂やシルトが流路沿い、または、その周辺に堆積してできた帯状の高まり。
		後背低地	自然堤防などの背後にある低地のほか、河川の堆積作用があまり及ばない低湿地。
		旧河道	低地の一般面より低い帯状の凹地で過去の河川流路の跡。
		湿地	地下水位が高く、排水性が極めて悪い低湿地。
		潮汐平地	干潮時に水面上に現われる平坦な土地。
		砂州・砂碛	波浪により作られた砂礫質の高まり。
		砂丘	風で運ばれた砂が堆積して形成された小高い丘。
		河川敷・浜	堤外地のうち、水面以外の部分及び海岸・湖岸の波打ち際の砂浜・礫浜。
	水部	河川・水涯線及び水面	河川は、原則として常時水流がある部分。水涯線は自然状態における水陸の境界線。水面は河川、湖沼、海、貯水池などの表面。
旧水部		旧版地形図、米軍撮影写真等より、水部と確認されたもののうち、現在埋土、盛土等に改変されたもの。	
変動地形	活断層	最近数十万年間に、概ね千年から数千年の周期で繰り返し動いた跡が地形に現れ、今後も活動を繰り返すと考えられる断層。	
	活断層（位置やや不明確）	活断層のうち、活動の痕跡が浸食や人工的な要因等によって改変されているために、その位置が不明確なもの。	
	活断層（活撓曲）	活断層のうち、変位が軟らかい地層内で拡散し、地表には段差ではなくたわみとして現れたもの。（たわみの範囲及び傾斜方向を示す。）	
	推定活断層	地形的な特徴により、活断層の存在が推定されるが、現時点では明確に特定できないもの。	
人工地形	切土地	山地・丘陵地、台地などの斜面を、主として切取りにより造成した平坦地または緩傾斜地。	
	盛土地	沼沢地、河川敷、谷などを埋立・盛土して造成した土地。	

第四紀更新世の兜沼層、ワンコの沢軽石層、完新世の豊徳火山灰層は、豊徳台地・阿沙流丘陵・円山台地を構成して分布しています。

サロベツ原野の下には、兜沼層と同層準と考えられる阿沙流層が厚く発達し、この上位にサロベツ沖積層及び泥炭層を載せています（北海道立地下資源調査所,1981）。

海岸に沿って、幅約 1.5～2 km にわたり数列の砂州や砂丘が南北に連続して発達し、それぞれその形状を異にしています。

また、河川流域及び台地周辺には氾濫原堆積物が、海岸地帯には海浜砂が分布しています。沖積層の大部分は、サロベツ原野等の湿原地帯に発達し、泥炭、粘土、砂等からなっています。

表 - 8 サロベツ地区に分布する地層の概要

時代	地層名	地層の概要
第四紀	沖積層	砂・礫・粘土・泥炭
	豊徳火山灰層	スコリヤ火山灰・火山砂・火山性粘土
	ワンコの沢軽石層	軽石・ローム質粘土・火山砂・粘土
	兜沼層・阿沙流層・沼川層・恵北層	礫・砂・粘土
新第三紀	更別層	砂・礫層
	勇知層	砂質泥岩
	声問層	泥岩及びシルト、泥岩・硬質頁岩互層
	稚内層	硬質頁岩及び泥炭ときに礫岩層あり
	増幌層	礫岩・砂岩・泥岩の互層

（北海道開発庁 5 万分 1 地質図幅説明書「抜海」（1965）、「沼川」（1968）・

北海道立地下資源調査所 5 万分 1 地質図幅説明書「豊富」（1960）、「稚咲内」（1981）より編集）

## 2) 地形の概要

サロベツ地区の位置する北海道北部には、標高約 200～300m の宗谷丘陵が広がっています。この丘陵の日本海側に、4000～5000 年前に形成されたサロベツ原野が広がっています。

サロベツ原野の生い立ちについては、最終氷期の最寒冷期以降 2 万年間の海水準変動（海進海退）にともない、河川谷（古天塩川）内湾（サロベツ湾）潟湖（砂州の形成にともなう）湿原（泥炭地）と姿が変化し形成された平野であると説明されています（阪口, 1958, 1974、佐久間, 1994）。

サロベツ地区の地形は大きく、1) 山地・丘陵、2) 台地・段丘、3) 低地、4) 湖沼に分けられます。山地・丘陵としては、サロベツ原野の東部に伸びる豊富丘陵や幌延丘陵、北西部に広がる更新世段丘が開析された阿沙流丘陵等があげられます。台地・段丘は、標高約 30～80m 前後の更新世段丘で、阿沙流丘陵の山頂部や東部、豊徳台地・円山台地や豊富丘陵の周縁部等に分布しています。低地は、段丘を開析する河川沿いに広がる谷底平野、サロベツ原野及びサロベツ原野の西側の砂州・砂丘列から構成されます。湖沼は、兜沼やペンケ沼、パンケ沼などの海跡湖とサロベツ原野南部の長沼、三日月沼、さらに、砂州と砂丘間のジュンサイ沼、長沼群等からなります。各地形については、以下の「(3) 地形各論 1)～4)」により詳しく紹介します。（以下、付図 3 及び図 - 35 を参照）



図 - 35 サロベツ地区の位置と地域区分

### 3)変動地形

サロベツ地区一帯は、石狩低地帯の札幌周辺と並んで北海道では第四紀の沈降量が最も大きいところで、700～1000m、最大 1500mに達する（池田ほか,2002）。天塩断層帯は、この顕著な沈降域とその周辺にあり、宗谷岬南方から北北西 - 南南東方向に延びる断層とサロベツ原野周辺の撓曲変形帯（とうきょくへんけいたい）からなります。

調査地区内には、活断層は確認されていませんが、サロベツ原野周辺の段丘は活傾動していて、豊富丘陵の西側の段丘は西へ、阿沙流丘陵や豊徳台地等の段丘は東へ傾動し低地へ入り込んでおり、約5～12万年の間に、段丘の東西端を基準として約7～30m沈降したものと推測されています（池田ほか,2002）。

調査地区の東方約10kmに幌延断層が南北方向へ延びています（池田ほか,2002）。

また、大曲 - 豊富断層は、稚内市街地南方付近から豊富の東方を経て雄信内（おのつぷない）付近で天塩川を横断する北北西 - 南南東走向の断層です（安江ほか,2005）。なお、この断層は活断層ではなく、地質断層と思われます。

#### (3) 地形各論

##### 1)山地・丘陵

サロベツ地区の北西部や東部には、山地・丘陵がサロベツ原野を取り巻くように分布していて、阿沙流丘陵、豊富丘陵、幌延丘陵、天塩山地からなります。これらは大部分が開析されていますが、阿沙流丘陵を主として一部未開析の段丘が含まれます。

##### a)阿沙流丘陵

サロベツ原野の北西部に位置する標高約80～90mの丘陵です。清明川（せいめいがわ）とオネトマナイ大沢川とその支流により開析されていますが、尾根沿いに細長く更新世段丘が残存し分布しています。

丘陵地内の尾根沿いの地域は牧草地として、その他は森林となっています。

##### b)豊富丘陵

豊富丘陵は、サロベツ原野の東、豊富市街地の北に位置する最高標高130mの丘陵を主体とします。山麓部には更新世段丘が存在し、西部山麓の段丘は西側に約10～30m/(約5万年～12万年)活傾動し末端は低地に入り込んでいます。丘陵の東部は、更新世の沼川層・恵北層から構成される段丘が幌加川や福永川により開析されています。

丘陵は森林を主体とし、山麓の段丘は主に牧草地として利用されています。

なお、丘陵の東部を切土、盛土を繰り返して南北に縦断する豊富バイパスが2005（平成17）年11月に開通しています。

##### c)幌延丘陵

豊富丘陵の南に位置する幌延丘陵は、標高約120mの丘陵で、豊富丘陵に比較してオネベツ川等による開析が進み、谷底平野が丘陵内のより奥深くまで入り込んでいます。更新世の段丘は標高約10～30mで、丘陵の北端、豊富町新生（しんせい）付近に存在します。丘陵地は、全体が森林で覆われ、段丘面や谷底平野の部分は牧草地として利用されています。

##### d)天塩山地

天塩川の左岸、調査地域の南東側に位置する山地で、山地の北端が調査地域にかかっており、谷の出口から小規模な扇状地が氾濫原へ押し出しています。山地は森林で覆われ、扇状地や谷底平野などは牧草地となっています。

## 2) 台地・段丘

サロベツ地区の台地・段丘は、a) 阿沙流段丘、b) 豊徳台地・円山台地、c) サロベツ川上流の段丘に区分することができます。

### a) 阿沙流段丘

阿沙流丘陵の東側、豊富町沼向から阿沙流にかけては東に活傾動する更新世段丘が広がっており、末端部は低地に潜り込んでいます（写真 - 16）。この段丘は、約5～12万年の間に、段丘の西端を基準として約7～8m沈降したものと推測されています（池田ほか, 2002）。

また、兜沼の北部に広がる段丘面は、標高40mほどですが南へ向かって高度を下げて兜沼の東で低地に潜り込んでいます。

段丘面は、主に牧場や牧草地として利用され、一部に集落が立地しています。

### b) 豊徳台地・円山台地

阿沙流丘陵の南西に位置する豊徳台地は、西側の砂州・砂丘とサロベツ原野に挟まれた北側を頂点とするくさび形をしています。この台地に発達する第四紀層は、更新世に属する兜沼層、ワンコの沢軽石層、完新世に属する豊徳火山灰層です（北海道立地下資源調査所, 1981）。この段丘面は、河川による浸食が進み、緩傾斜の浅い谷が形成されています。

段丘面は、西側が急傾斜しており標高が最も高く（三角点標高 55.2m）、活傾動により東に向かって徐々に高度を下げ、東のサロベツ原野に被覆されます。活傾動の量は、段丘東端で約5～12万年の間に、段丘西端を基準として約10～25m沈降したものと推測されています（池田ほか, 2002）。傾斜の緩い東側の段丘面は、主に牧草地として利用され、牧場も点在しています（写真 - 17）。



写真 - 16 兜沼と阿沙流段丘  
（遠くに見える山は利尻岳）



写真 - 17 サロベツ原野と豊徳台地

円山台地は、サロベツ原野の中央にある残丘状の台地で、頂部に二等三角点「円山」（標高13.3m）があり、全体に傾斜が緩やかです。東側末端部は約5～12万年の間に、段丘西端を基準として約7m沈降したものと推測されており（池田ほか, 2002）、続く段丘面は東のサロベツ原野に被覆されています。円山台地も豊徳台地と同じく、段丘面には緩傾斜の浅い谷が形成されています。

### c) サロベツ川上流の段丘

豊富丘陵の東側、サロベツ川や幌加川、福永川の周辺等に広がる更新世の段丘からなる地域です。サロベツ川周辺の段丘は、沼川層・恵北層からなる地域で（北海道開発庁, 1968）標高約 30～40mの緩やかな段丘面となっており、主に牧草地として利用されています（写真 - 18）。また、豊富丘陵の東側の山麓に存在する段丘は、標高が約 50～60mで、幌加川により開析され、尾根状に残る段丘は森林となっており、山麓部の平坦な段丘は牧草地として利用されています。

福永川上流部は、更新世の沼川層からなる地域で（北海道立地下資源調査所, 1960）標高約 20～40mの緩やかな段丘面となっており、牧場や牧草地として利用されています。

近年、幌加川周辺の段丘面では、大型の建設機械で段丘面を削り谷底平野を埋めて、牧草地をより平坦にする改変が行われています。



写真 - 18 サロベツ川上流域の更新世段丘

### 3) 低地

サロベツ地区の低地は、a) サロベツ川上流の低地、b) 上サロベツ原野・下サロベツ原野、c) 天塩川下流の低地、d) サロベツ沿岸砂州・砂丘列に区分することができます。

（以下、この「3) 低地」の項では、ボーリング資料について、巻末の「参考資料 1 サロベツ地区ボーリング資料」を参照のこと。）

#### a) サロベツ川上流の低地

豊富丘陵東側のサロベツ川と幌加川周辺の低地で、サロベツ川沿いの細長い谷底平野の後ろには埋め残りの後背低地が残っていますが、現在、排水路等の整備によりほとんどが牧草地として利用されています。豊富町開源（かいげん）南部の後背低地での簡易ボーリング資料 B - 1 によると、表土（20cm）の下に腐植物根混じりのシルトが 55cm まであり、その下は泥炭が 150cm まで続いています。また、豊富町目梨別（めなしべつ）集落の北方の氾濫原での簡易ボーリング資料 B - 2 によると、表土（20cm）の下に腐植根混じりのシルトが 69cm まであり、69cm から下は粘土となっており、簡易ボーリング調査用の検土杖（けんどうじょう）が体重だけで貫入するような軟弱な地盤になっています。

また、川沿いには湿地が一部に残存しており、ハンノキやヨシ等の植生に覆われています。

#### b)上サロベツ原野・下サロベツ原野

サロベツ原野は、この調査地域の大部分を占め、北は兜沼から南は天塩川周辺に至る、南北約 27km、東西約 8 km、面積約 216 km<sup>2</sup>の低地で、河川沿いの氾濫原を除いて後背低地が広がっています。地域内はきわめて低平で、標高は北部で約 8 m、南部で約 2.5m程度、平均の傾斜は約 1/5,000 です（写真 - 19）。

\* サロベツ原野は、旧殖民地の原野名として使われ、それが字名となっても通用しました。今では、サロベツ原野のうち、北部の豊富町づきを上サロベツ原野、南部の幌延町側を下サロベツ原野と呼ぶようになりました（幌延町史）。

本調査では、兜沼からペンケ沼までの豊富町の地域を上サロベツ原野、ペンケ沼から天塩川までの地域を下サロベツ原野としています（図 - 35 参照）。



写真 - 19 サロベツ原野南部の長沼

サロベツ原野の低地は、氾濫原と後背低地で構成されており、河川沿いに氾濫原が細長く形成され、氾濫原の後ろに後背低地が形成されています。

後背低地は、一般的に泥炭で形成されており、円山台地の北方での簡易ボーリング資料 B - 4 によると、表土（20cm）の下に泥炭が 150cm まで堆積していて、簡易ボーリング資料 B - 5 でも表土（20cm）の下のシルトや腐植物混じりの粘土の下、50～150cm に泥炭層が確認されました。

また、氾濫源での簡易ボーリング資料 B - 7 によると、表土（20cm）の下にシルトが 32cm まで、その下にシルト質粘土が 90cm まで、さらにその下は腐植物混じりの粘土が 150cm まで堆積していて、いずれも地盤は軟弱な地域であることがわかりました。

また、上サロベツ原野の国立公園内の一部でも、1970（昭和 45）年から 2002（平成 14）年までにポンプ浚渫船等を用いたミズゴケ泥炭の採掘が行われていました。豊富ビジターセンターの北側では湿原の復元事業が行われていますが、円山台地南側の採掘跡地に開水面として残っているところもあります。

原野内の後背低地にある牧草地は、排水路の整備で、表層は大型の農業機械も入れるような硬い地盤になっていますが、地表から約 50cm 下では、泥炭層になり、簡易ボーリング調査用の検土杖が片手でも貫入できるような軟弱な地盤であることがわかりました。



サロベツ原野の地形の特徴として、河川は、原野内を主に南北方向に流下しており、清明川、オンネベツ川、兜沼川等が、それぞれサロベツ川に合流し、サロベツ川も地区の南部で天塩川に合流して天塩町市街の南西で日本海に注いでいます。サロベツ川は、1966（昭和41）年に豊富町落合から開運橋上流まで湿原を横切る形で放水路が開削され、この地域の排水が進むことになりました（前述 p28 参照）。

また、豊富丘陵と幌延丘陵の境を流下し、豊富町の市街地付近からサロベツ原野に流れ出る下エベコロベツ川は、低地への出口に扇状地を形成しています。豊富町の市街地が立地している地点のボーリング資料No.5を調べると、市街地の地盤は、礫混じりのシルト層や砂層からなっており緩扇状地が押し出される形で発達していることがわかります。

下エベコロベツ川は、ここから北西方向に小蛇行を繰り返しながらサロベツ原野を流下していました（付図3の旧下エベコロベツ川及び旧サロベツ川の流路を参照）が、現在は、人工的に開削され、豊富市街から西へそして福永川と合流して南西方向に流れ、パンケ沼へ流下するように付け替えられています。

サロベツ原野では湿原の発達（低層湿原～高層湿原）により、河川より周辺部が高くなり流路の固定化がみられ、傾斜が緩やかな割には蛇行の幅が小さくなっています。

サロベツ原野のもう一つの地形的特徴として、北部に兜沼、中央部にはパンケ沼やパンケ沼などの海跡湖が点在していることが挙げられます。

北部の上サロベツ原野は、現在、排水路等の整備が進み、大部分が牧草地として利用されていますが、サロベツ川沿い等には湿地が残っており、ハンノキやヤチヤナギ、ヨシ等に覆われています。

南部の下サロベツ原野は、現在、排水路等の整備が進み牧草地として利用されている地域もありますが、上サロベツ原野に比較してヨシ等の植生に覆われている湿地が多く存在しています。

サロベツ原野では、1955年頃～1970年頃にかけて、洪水対策と農地化のために大規模な排水路の整備が進められたため地下水位の低下が起こり、排水路周辺ではヨシ、スゲ等の湿原植物に代わりササ等が繁茂する傾向にあります。こうした大規模な開発事業が完了した後も地下水位の低下は継続していると考えられており、その対策として地下水への影響要因である、融雪期の河川水位や融雪起源の水の涵養量の変化といった流域規模の水循環に着目する必要があるといわれています（羽山・中津川,2004）。

#### c)天塩川下流の低地

天塩川は、源を北見山地南部の天塩岳（標高 1,557.6m）に発し、北流しながらいくつもの狭窄部を抜け、日本海に注ぐ流域面積 5,590km<sup>2</sup>、幹川流路延長 256kmの大河ですが、今回の調査地区はそのうち、国道 40 号線の天塩大橋から下流側の地域にあたります。天塩川下流の現在の流路は人工的に開削したもので、旧河道は北側の幌延地域に卓越しており、パンケ沼の東南 1 kmに旧河道の一部である長沼が残存しています（写真 - 19 参照）。この地域は氾濫原が広がっており、簡易ボーリング資料 B - 8 及び B - 9 では、表土（20cm）の下にシルトが 37～50cmまで、その下には腐植物混じりの粘土が堆積していることがわかりました。旧河道部を流れる原子の沢川（はらこのさわがわ）より西では、天塩川の影響をそれほど受けなかったと推察される後背低地が広がっています。

天塩川より南側の地域には、旧水部と氾濫原が広がっています。また、この氾濫原の中ほど

にある天塩町振老（ふらおい）の西方には後背低地が広がっており、農地開発中のこの地域の簡易ボーリング資料B - 10 では、表土（20cm）の下に腐植物を多く含むシルトが 55cm まで、その下には110cmまで腐植物を多く含む粘土が、さらに110cmから下には泥炭が堆積していて、簡易ボーリング調査用の検土杖が体重だけで貫入できる軟弱な地盤からなり、表層は足が沈み込むような地域であることがわかりました。

これらの低地の大半は、現在、開発が進められ牧草地となっています。

#### d) サロベツ沿岸砂州・砂丘列

サロベツ原野西側の海岸線に沿って、調査地域の北端稚内市夕来（ゆうくる）から南端の幌延町浜里（はまさと）に至る幅約 2 km、長さ約 28km の砂州・砂丘が連なっています。このうち、北端部を流れるオネトマナイ大沢川の河口部より北側の地域には、海岸線近くから内陸部へ砂丘が形成されています。海岸線に近い砂丘は、幅約 100～500m、標高約 15mほどで、海岸線に沿って南北方向に発達し、草地となっています。それより内陸部には、約 5500～5000 年前頃に形成（大平, 1995）された幅約 1～1.5km、標高約 20m の砂丘列が南西方向から北東方向へ連なって砂山状に残っており、トドマツ・アカエゾマツの針葉樹やミズナラ等の広葉樹の混交した原生林が見られます（写真 - 20、21）。



写真 - 20 海岸部の砂丘



写真 - 21 稚内市夕来の砂丘列間の後背低地

オネトマナイ大沢川河口付近より南の地域では、海岸線に沿って幅約 600～1000mにわたり、標高約 5～15mの砂州が南北に数列形成されています。この砂州は、海岸砂丘列といわれてきましたが、今回の調査では資料（大平, 1995）等を参考にして砂州（浜堤列）で表現しています。砂州の上にも風成砂が薄く堆積しています。それより内陸部には、約 5500～5000 年前頃に形成（大平, 1995）された標高約 15～20mの砂丘が、幅約 500～1000mにわたり、砂山状に残っています。

砂州や砂丘列間には、後背低地が存在し、特に、砂州と砂丘間には、ジュンサイ沼や長沼群など大小の湖沼が存在しています。稚内市の東側の砂丘列間低地の簡易ボーリング資料B - 6 では、表土（15cm）の下にシルト混じり砂が 65cm まで、その下に 100cm まで腐植物を含むシルト質砂、100cm から下にはシルト混じりの砂（細砂）が堆積していることがわかりました。

砂州のうち、海岸から 2～3 列目には、ミズナラやカシワの風衝林が見られ、また、内陸部の古い砂丘にはトドマツ・アカエゾマツ等の原生林が見られます。

幌延町浜里付近の砂州は、砂を採取して掘り下げられていましたが、現在は砂の採取地が内陸部へ移っています（写真 - 22）。

#### 4) 湖沼

サロベツ原野には、ペンケ沼、パンケ沼、さらに兜沼などの海跡湖や長沼、三日月沼など旧河道の名残の湖沼が存在し、また、海岸沿いの砂州と砂丘列間低地にはジュンサイ沼や長沼群など大小の湖沼が点在しています。

なお、ペンケ沼とパンケ沼については、「3. 湖沼調査報告」で詳述しています。

##### a) 兜沼

兜沼は、サロベツ原野の北端部に位置する、周囲約 3.5km、最大水深 2.0m（環境庁，1993）面積 1.46km<sup>2</sup>（平成 18 年全国都道府県市区町村別面積調）の沼です。旧サロベツ川の後背地に周囲に比べ堆積が進まない部分として形成されています。1947 年撮影の空中写真と比較すると面積が約半分になっていますが、これは、排水路整備等による水面の低下が主な原因と考えられます。

また、近年、湖岸にはオートキャンプ場や公園が整備されています（写真 - 23）。



写真 - 22 海浜砂の採取（幌延町浜里）



写真 - 23 阿沙流丘陵末端部と兜沼

##### b) 長沼群・ジュンサイ沼

砂州と砂丘列間低地に点在するジュンサイ沼や長沼群等は、南北方向に砂州や砂丘に沿って細長く形成されていますが、流入する河川はなく主に雨水や降雪により水分が補給されています。

これらの湖沼には、エゾヒツジグサ、コウホネ等の植生が発達し、周りの湿地には、ツルコケモモ、ミズゴケ群落等が見られます。